第二中隊の状況

二中隊正面の敵情、前進陣地、分哨変化なし、陣地構築に専念する。

本部陣地の状況

敵情変化なく本部壕および食糧壕の構築に専念する。張間中尉阿波連捜索隊長となり捜索中。

第三中隊の状況

渡嘉敷正面の東山分哨、渡嘉敷分哨共変化なし、船舶団長護送のため攻撃艇で出発したる中島一郎少尉其の後情報不明。陣地構築に専念す。

整備隊の状況

1．柴田伍長以下五名那覇に於いて基地隊本部との連絡業務に従事。

2．土肥技術伍長船舶団長護送のため出発したる儘其の後の状況不明。

3．鈴木技術軍曹以下六名本部張間中尉と共に阿波連捜索隊に参加。

4．中隊長以下陣地構築、戦闘配備に着く。

一六四〇、中隊長以下〇〇三〇の間旭沢、渡嘉志久、渡嘉敷より弾薬の収集移送に従事。

第一中隊と共に行動したる伊藤技術軍曹以下六名依然所在不明

四月八日曇

戦隊の状況及び装備

上陸したる敵が沖縄本島に転進したる後鋭意陣地構築、弾薬、糧秣の集積点検に努めたる結果、次の通り判明。

一、弾薬　小銃弾約五〇〇〇、軽機銃弾約三〇〇〇、重機銃弾約二〇〇〇、擲弾筒弾約二〇〇及び自動短銃弾約一〇〇〇

二、器材　爆薬（黄色薬）少量、爆薬棒　少量。

三、糧秣　開戦前約六ケ月分が現在人員の約二ケ月分（一日定量三〇〇瓦以内で）

四、米麦の収穫なく村民の自給自足不可能。

五、本日より本部に於いて蘇鉄の採取をなし食糧確保に全力を揚げるに付き各隊は陣地構築に専念するよう通達。

六、戦隊は目前の敵輸送船を再び攻撃することを計画、陣地の構築、強化に必要なる資財器材の確保を図りたる後実施の予定、攻撃時期は追って決定

敵　情

慶良間海峡の敵艦船の出入り激しく飛行艇二機を以て渡嘉敷西岸阿嘉島東岸を旋回飛行哨戒する。前島方面には約五十隻位の艦艇集結中を望見す。

阿波連斥候の報告に依れば駆逐艦一入港、上陸用舟艇にて敵兵五名上陸、部落内に敵兵見えず。

四月九日曇　〇七四〇第一中隊岸川少尉以下五名無事本隊に到着合流す。敵情変化なし、夜間特攻機飛来す。海峡の艦船煙幕を展開、対空射撃激し。

四月十日曇　戦隊長水上特攻不可能になったため残余の爆雷を以て再び水上特攻を計画、第三中隊をして之を準備実施せしむる様を命令、資材器材の集積を開始。

四月十一日曇　〇九三〇頃敵兵二十数名渡嘉敷港に入港上陸、行動不明のため戦隊長左の如く新海中尉に命令し行動せしめる。

戦隊作戦命令

一、渡嘉敷監視哨よりの報告に依れば敵兵約二十数名は渡嘉敷に上陸せり。

二、新海中尉は軽機関銃一を含む部下十名及び整備隊より差し出したる一ケ分隊を併せ指揮し渡嘉敷に到し陣地を占領し各種物資収集の為差出しある部隊将兵の収容に任ずべし。

三、整備隊長は一ケ分隊を本部に差出し新海中尉の指揮下に入らしむべし。午後敵は家畜を徴発して退去したる模様なり、我が

方の損害なし。

四月十二日晴　昨十一日敵兵退去に伴い本部より物資収集の将兵再び出発する。敵情変化なし、沖縄本島の戦線嘉手納中部より南へ進行し数十の照明弾夜を徹して打上げ、又那覇以南の南部戦線には空襲艦砲射撃を熾烈に実施中。

四月十三日晴　敵情　慶良間海峡の艦船　戦艦一、駆逐艦六、大小艦艇五四、飛行艇三八、那覇　残波岬、前島方面より阿波連方向に忙しく行動　儀志布、座間味間の海峡に機雷を設置したる模様、点々と浮標を発見する。

夕刻一八〇〇頃留利加波方面で小銃音聞こえ舟艇三を以て約三十名上陸せる模様、一九三〇頃退去する。終日グラマン四機、飛行艇一を以て絶えず哨戒す。

四月十四日晴　慶良間海峡の敵情変化なし渡嘉敷島に毎日上陸する敵の行動依然不明　目的判明せず、唯家畜の徴発あるも水浴したり又部落入口付近を砲撃、阿波連には一部常駐しある模様なり。

四月十五日晴

一、予て計画ある爆雷を以て水上特攻の為、第三中隊木村伍長以下軍夫八名、渡嘉敷村落より爆雷運搬作業を実施中、上陸しある敵に発見され交戦戦死す。

二、阿波連より渡嘉敷に移駐行動中の第一中隊勤務隊塚本、加藤上等兵茶畑付近にて敵と交戦戦死す。

三、第二中隊鈴木少尉以下二名所在不明の勤務隊林一等兵捜索の為出発す渡嘉敷旧農業会裏山凹地に遺体を発見埋葬す。

四月十六日　慶良間海峡の艦船減少模様なるも渡嘉敷島周辺の警戒特に厳重なる模様、敵は我が方の行動察知したるものか海岸洞窟入江等を厳重警戒しある模様、渡嘉敷沖に駆逐艦一、砲艦二、哨戒艇二停泊せる模様本日も三十数名の敵兵上陸午後阿波連方向に移動す。本日も家畜を略奪しある模様。

四月十七日より四月二十四日迄の間未記録のため詳細不明、別段敵情我方変化なし。

四月二十五日曇　〇九三〇敵大型発動艇（上陸用舟艇）一隻兵員約三十二名渡嘉敷港に上陸。一一〇〇全員乗艇の上阿波連方向に退去す外に別に変化なし。

四月二十六日晴　午前中別に変化なくも午後第二中隊駐止斥候旭沢分哨員、敵と交戦高橋分哨長重傷を負ふ、同分哨安楽候補生戦隊本部に戦闘状況報告のため帰隊す。

戦闘状況

旭沢街道を渡嘉敷に向け前進中の敵を発見するや軽機関銃を抱え敵の前面に進出せんとするを敵に発見され自動小銃の乱射を受け其の一弾不幸にも軽機関銃弾嚢下部に命中、発射不可能となり之を代えんとする折、敵の手榴弾に依り全身数ケ所に爆傷を受くるも機を失せず軍刀を引抜き正に斬らんとするとき、敵の小銃連続して右大腿部に命中、分哨長無念にも重傷を負ふ、然し、敵は其の侭遁走撃退す。

四月二十七日より四月二十九日迄　未記録のため詳細不明。

四月三十日晴　〇七〇〇慶良間海峡の状況　敵艦船合計九十四隻、飛行艇三〇機停泊。一〇三〇、敵約三〇名渡嘉敷港に入港、上陸一一三〇頃南方に退去す。

戦隊は持久戦に備え食糧確保のため現地自活班の編成を命令、直ちに実施す。

一、戦隊は現地自活班を編成し所要の各種糧秣類の栽培採集加工等の一切の作業を担任せんとす。

二、楠原中尉は現地自活班長となり班員を指導し第一項の任務を担任すべし。

五月一日曇　各隊は野菜食糧の耕作採集を実施、外陣地構築を徹底的に実施。本部各中隊連絡壕の構築を開始。第三中隊非常配備訓練を実施。

五月二日曇　敵情変化なし我方陣地構築に精出す。

五月三日曇　〇九四〇戦隊長第三中隊陣地巡視を行ふ。引続き整備隊の巡視を

行ふ。

五月四日晴　渡嘉敷島周辺の敵は数日来より厳重なる警戒を行い絶えず島の周辺を哨戒し隠れ場所と思しき処へ艦砲射撃を行い我方の損害多し。

一三〇〇船舶団渋谷見習士官、宇田上等兵東山分哨にて敵の銃撃を受け戦死す。第三中隊池田少尉以下三名阿波連将校斥候となり出発す。

五月五日晴　軍司令部船舶団より慶良間列島出身の将兵を以て編成の稲垣少尉以下十一名、沖縄本島よりくり舟三隻を以て渡嘉敷島連絡の任を受け無線機を携行渡嘉敷に到着。内一隻は途中行方不明、乗艇者我が戦隊の高北良軍曹、松村伍長、全員士気旺盛、直ちに戦隊本部に連絡報告、軍司令部宛、渡嘉敷島健在の電報を打つ。

第三中隊、小松原少尉本部付となり恩納原前進陣地分哨長となる。沖縄本島の戦闘状況を聞き稲垣少尉以下の作戦行動について打合わせを行う。

五月六日晴　沖縄本島の戦闘緊急を要するため戦隊長は残留船舶団の将校を本島に帰還せしむるため次の命令を下達作戦に参加せしむ。

戦隊作戦命令

一、木村少尉は将校斥候となり整備隊伊藤軍曹、加藤上等兵、防召兵二名、他に糸満防召兵六名を指揮し舟により本六日夜渡嘉敷を出発、沖縄本島に到り軍司令部、船舶団其の他関係方面と連絡すべし。

二、木村少尉は三池少佐の沖縄本島帰還を護送すべし。

三、木村少尉は連絡任務終了後原所属に復帰すべし。

四、伊藤軍曹は連絡任務完了せば時機を見て沖縄本島に於ける当部隊残留者を指揮し、帰隊すべし。

五、楠原主計中尉は所要の糧秣を準備すべし。

六、細部に関しては別に示す

七、予は現在地に在り。

戦隊長　　赤松嘉次

第三中隊長、皆本少尉以下五名阿波連より弾薬運搬のため一八〇

〇出発す。

夜半東部海岸より「クリ舟」三隻にて沖縄本島へ三池少佐以下出発。

五月七日　稲崎少尉以下沖縄本島より到着したる連絡員東側海岸に於いて本島との無線連絡を開始。

第三中隊阿波連より弾薬爆雷運搬作業を実施帰還す。阿波連方面より銃声、迫撃砲弾を打込まれる。

五月十日晴風無　〇九四〇、敵上陸用舟艇にて約一五〇名渡嘉敷に上陸、上陸するや迫撃砲並びに銃撃を以て牽制しつつ迫撃砲陣地並びに諸作業を実施しあり何か企図しあるものの如く、敵の兵力約一五〇名、戦車一台、迫撃砲数門。渡嘉敷部落周囲の高地に陣地構築中。

記念運動場に物資集積、阿波連方面及び渡嘉志久方面の砲声漸次北上して渡嘉敷方面へ移動、稲垣少尉以下の無線通信が敵に補足せられしか敵は当渡嘉敷島の掃討を企図しあるものの如く上陸増強しあり戦隊長直ちに各隊連絡将校を集合せしめ敵を邀撃戦闘配備を命令す。

〇八一五作命甲第三十三号

一、阿波連駐止斥候よりの報告に依れば敵は昨九日阿波連方面に対し艦砲射撃を実施すると共に舟艇及び戦車を以て阿波連湾及び野嘉良崎南方地区に上陸し監視哨高地を挟撃する態勢にあり、監視哨は目下後退して敵情監視中なり、敵は渡嘉敷島を掃討する如き兆候あり。

二、各隊は直ちに戦闘準備を整え何時たりとも応戦敵を撃滅する態勢にあるべし。

一〇〇〇　作命甲三十四号

一、阿波連方面の敵情は兵力約一〇〇名を九日朝来阿波連東西線海岸に上陸監視哨高地を挟撃中にして、〇九五〇渡嘉敷湾に大型発動艇五隻を以て兵力約一五〇名を上陸せしめ渡嘉敷攻略を企図せるものの如し。

二、戦隊は戦闘配置につき敵の攻撃を警戒せんとす。

三、各隊は直ちに戦闘配備に就くと共に兵力約半数を将校の指揮を以て陣地及び前進陣地の中間に配し且陣地前方に斥候を派遣し敵情を捜索すべし。

四、前進陣地内部に敵兵を入れることなく之を撃滅すべし。

五、陣地内の兵力は戦闘配備に就くと共に軍夫を以て陣地構築作業を続行すべし、第三中隊田中熊一伍長整備室へ伝令として任務遂行中右上膊部に迫撃砲の破片創を受くも元気旺盛なり。

五月十一日曇　敵上陸部隊は渡嘉敷村発、周囲の高地に陣地を構築中。

戦隊は之に徹底的改善を与えるべく初期攻撃を計画、直ちに挺身斬り込隊を編成、攻撃を開始す。

戦隊作戦命令甲三十五号

一、敵情は昨夜示したる外渡嘉敷港より逐次軍需品、兵器類を揚陸武備を増強し有るものの如し。

二、戦隊は本日夜暗を期し渡嘉敷部落に上陸せる敵中に斬り込を敢行せんとす。

三、第三勤務小隊より下士官以下四名の斥候を渡嘉敷に派遣し敵の集積しある弾薬糧秣を爆破せしむべし。

四、第一中隊より高取少尉以下五名をA高地南方に派遣し敵の迫撃砲陣地を夜襲すべし。

五、第二中隊より将校の指揮する約十名（軽機関銃一　擲弾筒一を附す）をA高地に派遣し搔乱射撃を実施すべし。

六、之がため南少尉は第一中隊へ爆薬管一、破壊筒（一米位のもの）一、第三勤務小隊へ爆発缶二を交付すべし。

七、各隊の現在地出発時刻は本夜二四〇〇以降と予定す。

五月十二日曇　戦隊は挺身斬り込隊の行動を容易にすべく部隊を一部前進、敵を擾乱せんとす。

一三一〇斬り込隊高取少尉（第一中隊）本部下の谷間に於いて負傷、伝令の報告を受け医務室玉木兵長以下五名を以て収容一五一〇帰隊。

戦隊作命甲第三十六号　略

戦隊作命甲第三十七号

一、敵は本渡嘉敷島掃蕩を企図しあるものの如し。

二、戦隊は現地自活作業を中止し鋭意陣地強化を図ると共に遊撃戦を以て敵の企図を破壊せんとす。

三、現地自活班は一時解散し防衛隊員及び軍夫を各隊に復帰せしむべし。

四、各隊は先ず前進陣地を強化し遊撃戦闘を実施すべし。

五、稲垣少尉は明十三日夜現地を出発し渡嘉敷島南部に転進すべし。（防衛隊二名を附す）

六、戦隊は遊撃隊を組織せんとす之がため第二中隊より連下少尉以下下士官二名　第一、三整備中隊より下士官以下三名を選出し連下少尉の指揮下に入らしむべし。

七、遊撃隊出発の時刻及び細部は別に示す。

第三中隊前進陣地敵襲を受け原山、吉尾、野崎伍長負傷す。

五月十三日晴　〇七三〇第一中隊斬り込隊香山軍曹以下四名挺身任務完遂無事帰隊（第三中隊の側面攻撃を容易ならしむため擾乱陽動任務）第三中隊未帰還一〇〇五　一二一〇　一三〇〇の三回に分け敵兵約七十五名渡嘉敷湾に侵入上陸す。

一三三五敵迫撃砲弾茶畑付近に落下損害なし。

一三五〇敵兵約四十名茶畑南端より侵入、前進陣地と交戦記念運動場裏山に退去せり我方損害なし。

一七〇〇第三勤務小隊公野伍長以下四名挺身斬り込の任務を完遂し帰還す。

戦果　渡嘉敷弾薬集積所爆破、我損害なし。

五月十四日晴　一〇二五敵大型発動艇（上陸用舟艇）一　渡嘉敷に侵入武装兵三十五名上陸海岸に待機　敵陣地より我方へ迫撃砲弾　軽機関銃集中砲火を受く、渡嘉敷西方旧監視哨付近に火災発生、一部敵兵整備中隊前進陣地に接近交戦撃退す。

我方の損害、第三中隊第三勤務小隊中道上等兵戦死、上陸の敵は阿波連方向に退去す。

五月十五日雨　第三中隊前進陣地池田小隊よりの報告に依れば渡嘉敷三叉路付近に掩体ありとの申送りあるを偵察するも発見出来ず指示を求めて来る。一〇二〇上陸用舟艇一隻約三十二、三名上陸梱包物の揚陸をなし離岸す。各隊に迫撃砲に隊する退避壕の構築を急がしむ、敵は一一〇〇頃より防波堤に達着し渡嘉敷部落より水タンクで水を運び去る模様なり。一三〇〇、自動貨車を持つて物資の揚陸を行ふ。

一六三〇上陸用舟艇にて水タンク及び住民を乗せ離岸す。

五月十六日晴　敵情昨日と変化なく唯渡嘉敷の敵陣地は徐々に補強し、一部住民（所属不明）が敵に捕われ使役に使われ或いは敵陣地内にて起居しある模様なり。

五月十七日晴　敵の砲艦６６４入港偵察後退去す。大型上陸用舟艇一、住民約五十名を乗せ離岸、小型上陸用舟艇二隻にて敵兵約二十五名上陸揚陸後離岸す。我方損害なし。

五月十八日晴　一〇〇〇敵上陸用舟艇渡嘉敷に入港約四十名上陸、荷物を約一〇〇梱揚陸す。防衛招集中の大城逃亡中の処第三中隊歩哨森山伍長耕作地に於いて捕う。用便に行くと虚言して再び逃亡す。

一二四〇松の山陣地付近に白煙を発見第三中隊原山伍長斥候として出発、一四〇〇帰隊異常なし。

一五〇〇～一六〇〇砲艦らしきもの渡嘉敷東方に投錨す。

一六三〇住民らしきもの約三十名上陸用舟艇にて座間味方面に退去す。

五月十九日曇　敵兵約二十五名Ａ高地に来襲しLgを以て射撃せるも我方直ちに応戦撃退す。我方損害なし。

五月二十日　敵は相変わらず増強し頻りに我方の偵察を行う、敵兵二名渡嘉敷鰹工場煙突東側に出現、本部結城伍長（第三中隊出向）直ちに発砲撃退す。第三中隊小松原少尉記念運動場付近を偵察、鉄條網に引掛り鉄條網に結着しありし手榴弾に触れ発火爆発するもいち早く後退、被害なし。

五月二十一日晴　彼我の情況昨日と異常なし、唯敵は続々増強し本渡嘉敷島を掃討せんとしある模様なり、夕刻新たに住民八〇名揚陸す。

五月二十二日晴

作戦命令

一、敵は渡嘉敷島を掃討せんと企図しある模様なり。

二、戦隊は之に対し遊撃戦闘を開始敵を撹乱せんとす。

三、本部張間中尉は本部陣地より下士官五、兵二、水上勤務隊二十名を指揮し本戦闘を実施すべし。

四、出発の時期、場所、方法等は別に指示す。敵約一八〇名渡嘉敷に上陸。

本部陣地より張間中尉以下二十八名、谷本、小野、池田、向山伍長大橋一等兵、栗木二等兵、安田軍夫外十九名、約二十日間の日程で渡嘉敷東部高地嘉手刈付近敵の背後真上に陣地構築遊撃戦闘のための本部を出発。

五月二十三日曇　昨夜上陸したる敵は（約一八〇名）黒人を混えたる混成の模様にして警備交代のためか昨夜は炊事場付近に露営しあり米兵は各人荷物を纏め海岸に集積中なり、又天幕も一部撤収中。尚高地の敵は天幕を取外し、其の骨組も解体中なり、住民約四〇〇名揚陸す。

五月二十四日　一二〇〇上陸用舟艇一、北方より侵入渡嘉敷に入港兵印約三十名、揚陸、湾口に敵砲艦一、停泊（333）一三三〇敵大型上陸用舟艇一、入港し梱包等約六〇個揚陸す。一五〇〇LST 二隻北上積載品一隻、兵印一五〇名梱包等約一〇〇梱なり。残余の敵は大型小型天幕展開中（現在四）

五月二十五日～五月二十七日　彼我の情況変化なし。

五月二十八日　第三中隊配属中の特設水上勤務隊の軍夫、逃亡せし模様のため直ちに第三中隊をして俘虜捜索監視のため増援す。

五月二十九日　Ａ高地、整備中隊付近に日夜迫撃砲弾の集中砲火を受くるも被害なし。

第三中隊原山伍長以下五名俘虜護送のため出発す。

五月三十日　第三中隊原山伍長以下俘虜護衛より帰隊す。本部渡嘉敷東部嘉手刈陣地より連絡。敵は遊撃陣地構築の企図を察知してか斥候二名嘉手刈陣地北方に進出我が警備隊五〇〇米前方迄に進出後徹退す。

五月三十一日　毎日の如く渡嘉敷の敵陣地より迫撃砲の連射、入港中の艦艇より艦砲射撃を受くるも我方損害軽微なり。本部より川崎軍曹（通信隊）整備隊鈴木軍曹斬り込隊となり渡嘉敷に侵入、鈴木軍曹敵の鉄條網に引掛り手榴弾により戦死。

六月一日　渡嘉敷の敵は逐次増強する模様にして水陸両用車を使用し物資を揚陸しあり、第三中隊斬り込隊員丸子伍長連絡なし、第三中隊より前進陣地に対し捜索に出発す。

六月二日　第三中隊丸子伍長帰隊す、敵陣地内（伊江島住民）に於いて俘虜と共に起居せし模様なり。

敵情変化なし、相変わらず増強しある模様なり。

六月三日　阿波連、渡嘉敷、儀志布島方面に絶えず敵は監視せる模様なり。

六月四日　整備中隊平尾伍長石橋付近にて陣地構築中敵の機銃掃射を受け戦死す。

六月五日　敵は常に渡嘉敷に対し増強しあるものの如く水陸両用車を以て物資を揚陸す。

一三〇〇頃敵はＡ高地に対し重機関銃を以て約二時間射撃を受くるも被害なし。

一七三〇頃第三中隊渡嘉敷前進陣地前面に対し艦砲及び機関砲を射撃我方損害なし。

六月六日　敵は迫撃砲及び機銃を以て射撃するも我方被害なし、敵は数日来より頻りに我陣地を牽制しある模様なり。

六月七日　整備中隊前進陣地より渡嘉敷海岸の敵に対し小銃を以て射撃を行う。敵は直ちに迫撃砲及び機銃を整備隊前進陣地に打込むも我方被害なし。

一〇三〇駐止斥候米田上等兵栗良波稜線上に於いて渡嘉敷の敵より射撃を受け脛部並びに右上膊部に貫通銃創を受く。

六月八日　Ａ高地服務中の第三勤務小隊堀部、中野両上等兵壕内に於いて待機服務中敵約十名近接し自動小銃の射撃を受け堀部上等兵頭部盲貫

銃創により戦死。中野上等兵脛部貫通銃創の重傷を負う。敵は一五〇〇以降、迫撃砲、重機、小銃弾をＡ高地三中隊整備隊の前面に射込みたるも我方人員資材等損害軽微なり。敵より攻撃を受けし詳細次の如し。

六月七日前進陣地報告三中隊、池田少尉

一三一五我監視哨に小銃十数発、

一四三〇　渡嘉敷南海岸に於いて爆破二回、

一六三〇　Ａ高地に対し射撃（渡嘉敷より）

一七〇〇　渡嘉敷港より整備中隊前進陣地に対し数回射撃、我方よりの射撃に対し応射の模様。

六月四日前進陣地報告

〇六三〇　渡嘉敷より前進陣地に自動小銃連射。

〇六四〇　Ａ高地に迫撃砲十数発射撃を受く。

〇八四〇　渡嘉敷よりＡ高地に迫撃砲十数発。

〇九一〇　前進陣地に海岸より自動小銃連射。

〇九四〇　海岸よりＡ高地に迫撃砲十数発。

一〇三〇　恩納ケ原に自動小銃連射、渡嘉敷に於いて爆破音大、

一一一〇　前進陣地に迫撃砲十数発

一三〇〇　入港中の敵艦船より前進陣地に十数発、Ａ高地に十数発艦砲射撃

一四〇〇　より炊事の谷、Ａ高地に対し五～十分毎に迫撃砲四、五発射撃を行う。

一四五〇　前進陣地に対し火力の集中砲火三叉路に迫撃砲数発、敵は盲滅法に射撃を行うも我方被害なし。

一七〇〇　第三中隊丸子伍長渡嘉敷に斬り込及び敵情偵察のため出発（敵情偵察及び斬り込の場所、日時判断のため）

六月九日　本部張間中尉以下二〇名遊撃戦闘及び陣地構築完了し渡嘉敷東部台地嘉手刈より帰隊す。

第三中隊丸子伍長敵陣偵察より帰隊する。敵は昨昨夜より激しい砲火を我陣地に集中するも被害なし。

六月十日　敵は渡嘉敷記念運動場に鉄條網を敷設し地雷を敷設したる模様なり。

六月十一日　整備中隊日根小隊の偵察によれば次の如く陣地構築しある模様。兵力約五〇名目下構築中の模様なり。

石橋陣地、原田上等兵戦死す。

六月一二日　敵は間断なく射撃するも被害なし。

六月十三日　敵は昨夜より我軍の斬り込を恐れてか一方的射撃より一般的射撃に移り終日間断なく砲撃射撃を実施、夕刻より日没まで軽機関銃の乱射を受く。第一中隊斬り込隊長高取少尉負傷療養中の処、本日一七〇〇北方複廓陣地に於いて戦死を遂ぐ。

六月十四日　爆雷を以て再び水上特攻を実施すべく第三中隊をして準備せしむ三中隊爆雷運搬のため竹島伍長以下四名出発器材の集積を始む。

六月十五日　昨日同様、敵情変化なし、爆雷運搬を実施

六月十六日　爆雷攻撃準備のため第三中隊長以下儀志布島偵察に出発、夕刻帰隊す。

六月十七日　早朝石橋駐止斥候小松原少尉麾下の勤務小隊、小林伍長負傷、第二中隊勤務小隊中川上等兵渡嘉敷に於いて戦死。第二中隊斬り込隊長鈴木少尉敵陣地斬り込準備のため敵前の地雷掘出し除去作業中地雷爆発壮烈なる戦死を遂ぐ。夜半過ぎ石橋駐止斥候小松原少尉以下三名（小松原少尉、永井軍曹、森上等兵）敵情偵察中敵の敷設せる地雷に触れたるものの如く、所在不明となる。（戦死せるものの如し）

六月十八日晴　敵兵約七十名（黒人武装兵）渡嘉敷に上陸、旭沢、石橋。A高地付近に盛んに銃砲撃を実施する。敵は我が斬り込を恐れ各谷間並びに通路に盛んに地雷及び障害物を設置す。

六月十九日曇小雨　一八〇〇敵約十名留利加波道傘松付近に侵入、其の後敵の行動不明なる為之が偵察に駐止斥候として第二中隊森末伍長、佐藤伍長二名出発、二三〇〇頃迄偵察するも敵影を発見出来ず暗夜小雨の中帰途に着く、途中傘松の下、段々畑にて敵の地雷に掛かり森末伍長戦死、佐藤伍長耳部負傷す。

会報を左の通り下達す。

石橋付近には昼間十名内外の敵が駐在し部落内外も危険な状態となる（敷設地雷による）石橋～渡嘉志久間の通行を禁止す。

留利加波、阿利賀の道路の昼間通行禁止す、絶対に戦隊本部の許可を必要とする。

六月二十日曇　〇九〇〇水陸両用車二両を以て監視船に連絡に行き一両に人員約二十五名（内武装兵二名）一両に鉄材（長一・五米位の軌条の如し）を満載し揚陸す。一三五〇特大発（５１４０９）儀志布方向より湾内に入る。黒人兵約三十名上陸、帽子は白にて種々なり牽引車一両砲二門（砲身約二米野砲より小型にてゴム車輪四ケ）高射砲やも知れず。

六月二十一日　夜恩納河原自活班勤務防招隊員前里与太郎、恩納河原、河谷入口付近にて敵の埋設せし地雷に触れ戦死せるものの如し。

六月二十二日　本部無線機にて本島軍司令部最後の斬り込を敢行するとの電報を傍受す。

六月二十三日　一二〇〇頃水上勤務隊衛生兵玉木兵長戦病死す。

六月二十四日　〇七三〇艦砲、高射砲、迫撃砲を以て猛烈に射撃を開始、特にA高地に目標を置くものの如し。

〇八三〇敵兵約六〇名、A高地に攻撃を加え我軍と交戦す。

〇九五〇敵はA高地に迫撃砲重軽機を備え一八〇〇頃迄間断なく我陣地に向け射撃す、

一九〇〇敵はA高地を徹収、銃声殆どなし、

猶〇七三〇　艦砲によりA高地は敵の攻撃を受け多里少尉以下十名勇戦奮闘交戦一時間、状況止むなきに至り同高地を徹収す、此の戦闘に於いて島谷伍長、佐藤伍長、久保伍長、山田兵長、野々口一等兵、戦死の尊き犠牲を出す。

第三中隊、杉沼、森山伍長負傷敵は旭沢に地雷を設置する模様なり。最近各隊は稜線上に於いて敵の狙撃を受ける事頻なるによって昼間稜線上の通行を厳禁す。

六月二十五日　敵情及び陣地内変化なし、各中隊陣地構築に専念する。

六月二十六日　作業に陣地外に出る者、部落民に糧秣を強要するものあり強奪せしものは厳罰に処す旨各隊に通報す。

水上勤務隊軍夫三名氏名不祥、恩納河原に於いて糧秣を強要したる模様なり。

六月二十七日　戦隊長各中隊長を本部に招集しA高地失地後の戦闘計画を示達実施せしむ、各隊の情況異常なし。

六月二十八日～六月二十九日　異常なし、戦隊は依然として陣地構築及び各隊の縦面連絡壕の構築を実施す。

六月三十日　〇六〇〇第三中隊所属水上勤務隊軍夫吉本（名不祥）より岩村班等昨夜逃亡せる旨報告あり

一四三〇阿波連駐止斥候連下隊より連絡兵二名特設水上勤務隊曽根一等兵を主謀とする某事件の報告を受く。

一八〇〇新海中尉以下二十二名捜索隊を編成、曽根一等兵以下の偵察に出発す。

某事件とは

特設水上勤務隊斉田少尉以下二四〇名朝鮮人を主力とする軍夫で戦隊の舟艇を秘匿する舟艇壕の掘進、舟艇の泛水、引揚、器材の運搬を目的として集められ戦場にかり出されたものである。

敵の上陸後は西山複廓陣地に於いて日夜連日陣地作り（防空壕、タコ壺掘り）弾薬器材の集積に従事し武装する兵器なく、唯自決用の手榴弾一ケのみ与えられたるまったくの丸腰である。敵弾の落下する中、不足したる食糧に飢え精神的な焦燥に耐え切れず敵軍に集団投降したる事件である。

七月二日晴　〇五三〇稲垣少尉以下八名阿波連方面に於いて通信業務に従事中情勢の変化に伴い（沖縄本島軍司令部最後の斬り込を敢行し玉砕したるものと思われ以後通信が途絶したるものと判断）連絡不能となり通信器材を携行、本部に帰隊す。

日時不祥、防衛隊員大城徳安数度に亘り陣地より脱走中発見、敵に通ずる虞ありとして処刑す。

米軍に捕えられたる伊江島の住民米軍の指示により投降勧告、戦

争忌避の目的を以て陣地に進入、前進陣地之を捕え戦隊長に報告、戦隊長之を拒絶、陣地の状態を暴露したる上は日本人として自決を勧告す女子自決を諾し斬首を希望、自決を抱助す。

七月三日　第二中隊多里少尉以下A高地の敵陣に攻撃を実施之を撃退の上引揚ぐ、整備中隊の重機関銃之れを側面より援助攻撃す。敵は渡嘉敷に退避す。

戦利品　自動小銃二、弾丸六箱、手榴弾一三、鉄帽一、

昨日に引続き捜索隊を編成出発す。

七月四日　知念少尉以下十名、曽根一等兵及び軍夫捜索の為、渡嘉敷島南部阿波連方面に向かい出発す。

一七〇〇A高地付近及び阿里賀稜線迫撃砲並びに軽機の連射はげしい。

七月五日　〇二〇〇須賀上等兵以下二名、捜索より帰隊す。

一三〇〇捜索隊河崎軍曹以下七名逃亡者四名を逮捕し本部に護送帰隊す。

本日を以て捜索隊を解散各原隊に復帰せしむ。

七月六日　一四〇〇～一七〇〇渡嘉敷方面よりA高地整備中隊、前進陣地へ迫撃砲、重機、自動小銃の乱射激しく飛行艇も前日と異なり早朝より哨戒厳なり。

七月七日　A高地に於いて敵の遺棄せし自動小銃について本部兵器将校南少尉より該中隊に使用法を教育す。

七月八日　敵情昨日と変化なし。二〇〇〇第二中隊田中伍長以下三名、芭蕉蘇鉄採集班となり留利加波にて採集中留利加波沖に停泊中の艦船より攻撃を受け田中伍長右大腿部擦過傷、中本伍長右手に擦過傷の軽傷を負えり。

七月十日　〇八三〇片桐一等兵、栄養失調のため戦病死す。海峡の艦艇甚しく数を減ず。

七月十六日　整備中隊芝山一等兵、渡嘉敷に於いて戦死す。

七月十八日　〇五〇〇本部軍医、浮田少尉戦病死す。

七月二十日　第三中隊原口伍長栄養失調にて戦病死す。

七月二十一日　一六〇〇座間味方面より第一中隊陣地栗良波方面に敵の高射砲らしきものの水平射撃を受く、第一中隊田村伍長、左手切断、右大腿部に重傷を負えり。

七月二十七日　依然敵は攻撃して来る気配も見えず、唯日夜迫撃砲を主力として砲撃するのみ。

一一〇〇第一中隊稲森一等兵栄養失調のため戦病死す。

本部陣地杉橋一等兵栄養失調のため戦病死す。

七月二十八日　〇八〇〇本部陣地加藤上等兵栄養失調のため戦病死す。

八月一日　船舶団所属若山兵長、栄養失調のため戦病死す。

八月三日　武装兵一五〇名上陸す。

〇〇二〇～〇四三〇頃迄の間座間味高射砲陣地よりと思われる的なる砲撃、約一五〇発、攻撃を受くるも人員資材、被害なし。

一一〇〇頃渡嘉敷河畔陣地と思しき方向より銀納河原方面に対し数発高射砲攻撃をなす。

一七〇〇～一七三〇渡嘉敷方向より迫撃砲の砲撃を受くるも我方被害なし。

八月四日　整備中隊山内一等兵、栄養失調のため戦病死す。

武装兵約一六〇名上陸す。

一八三〇渡嘉敷方面より高射砲、迫撃砲の射撃を受くるも被害なし。本日戦闘機高々度にて頻繁に飛行す。

八月五日　一一三〇整備中隊前進陣地付近に敵迫撃砲弾十数発落下す。

八月七日　本部勤務隊斉藤上等兵、A高地付近に於いて敵より攻撃を受け戦死、此れを捜索のため整備中隊江崎伍長茶畑陣地よりA高地を捜索中左下肢、右を負傷す。

第三中隊犬塚伍長破傷風にて戦病死す。

第二中隊勤務小隊田中一等兵栄養失調のため戦病死す。

八月八日　第三中隊勤務小隊長新海中尉戦病死す。

敵兵約三十名一四〇〇頃A高地に進出薄暮に至る間攻撃す。

八月九日　一三三〇～一四四〇A高地９１重機、自動小銃の射撃あり、A高地の敵は昨日来より陣地構築中の模様。

八月十日　整備中隊前進陣地に敵兵約四十名来襲す。

第二中隊高橋伍長栄養失調のため戦病死す。

八月十一日　〇七三〇より戦隊命令に基き火網編成並びに射撃設備の点検を実施補修を行う。

第二中隊小隊長多里少尉有賀自活班に於いて高射砲弾により戦病死す。第一中隊勤務隊荒木上等兵行方不明となる。

一七〇〇頃より迫撃砲、機銃射撃を被く、第三中隊田中伍長、退避の際転倒、顔面に負傷を受く。

数日前郵便局長徳平氏他、渡嘉志久付近の稜線に於いて敵の潜伏斥候に捕えられたる模様。

八月十二日　払暁数発迫撃砲弾集中攻撃を受くるも何等異常なし、第三中隊陣地方面前方に敵水上機ビラを散布する。

一八〇〇東部海岸を警備する前進陣地田所中尉本部に緊急連絡あり。

情報連絡

数日来より東部海岸の谷間に住民続々と集結、異常な状態となり何か敵に通ぜしものあり至急調査されたい。

右の情報により本部知念副官谷本伍長、阿利賀恩納河原に起居する住民の行動調査に出発。阿利賀の谷間に住居せし住民は二〇〇〇頃より食糧を整え身辺の整理を行い移動する様子でざわめき其の行動を問い正すも語らず。

知念少尉沖縄の方言にて切々と話合うも語らず、現地に止まるよう、説得して恩納河原へ出発。

恩納河原に到着後警備分隊長中島軍曹に状況を聞くも不明にして住民を説得、情報を得たる処によれば数日前敵に捕えられたる郵便局長の手引きにより古波蔵村長以下幹部、既に敵に降伏し敵米軍に対し八月二十日迄に村民全部を降伏せしむることを約し東部海岸に集結せしめる模様で既に大半は集結しあるとの情報である。

之を説得に掛るも既に意思固く全く馬耳東風にして動けない者、

老幼な者を残し未明警備隊にかくれ三々伍々、恩納河原を脱出す。
戦隊長の意思通り住民の意思決定を尊重し敢えて之を阻止、攻撃せず。

八月十三日　東部海岸へ共に行動出来なかった住民、早朝より木の枝、或は竹に白紙又白布を付けて之を掲げ恩納河原より谷間へ谷間より田団道へ、田団道より米軍陣地へ三人、或は四人、又単独にて投降す。
東部海岸よりの駐在巡査外二名（大城防衛隊員、小学校の先生）の情報に依れば八月十日頃より東部海岸へ移動したる住民は十三日一〇〇〇敵上陸用舟艇二隻に乗艇、残った村民に対し離岸の舟艇より機関銃を以て銃撃を加え渡嘉敷方面に去る。
村長は八月二十日迄に悉く村民を投降せしむるため二十日以降日本軍軍隊及び残った住民に総攻撃を加え全滅せしむる条件を米軍に提示したと伝えられる。
知念副官谷本伍長駐在巡査外十数名を引率帰隊す。
一二〇〇第二中隊勤務隊松下一等兵栄養失調のため戦病死す。

八月十四日　戦隊は昨日の情報ににより渡嘉敷の敵陣地に対し最後の斬り込を行うべく各中隊に包囲隊形を計画直ちに実施に移さしむる。
第二中隊高橋伍長、A高地に於いて戦死。

八月十五日　本部通信室故障の無線機にて終戦の詔勅を傍受、敵陣地よりの放送により終戦投降の呼び掛けを受く。
戦隊長直ちに各中隊の将校を集め訓示を行ふ。敵飛行機よりビラを散布す。

八月十六日　早朝、我陣地内に既に投降したる村民陣地各所に敵軍よりの投降勧告文書を散布す。我歩哨線之を逮捕一部処刑す。
投降勧告文書次の通り
慶良間列島渡嘉敷島日本軍最高指揮官に告ぐ
一、貴軍は現在特に大本営との連絡を欠きいるを以て貴官に次の情報を通報せんとする。
二、日本政府は本日午前八時（日本時間）連合軍に対し無条件降伏をなせり。

三、日本国天皇陛下は次の如く宣せられたり。
全日本陸海軍並びに陸戦隊は直ちに対敵行動を停止し、最寄りの連合国軍隊に投ずべし。然らばジュネーブ会議に於いて決定されたる交戦規定に基き軍人としての礼儀と尊敬を受くべし。
四、投降の形式を貴軍と協定せんとす。貴官は協定のため隊長以下全員若し全員不可能の場合は若干の代表を我が軍方部に差出されたい、これら代表者は適切なる協定の成立したる後は可及的速かに貴官のもとに帰還せしむる事を予の面目にかけて致たす。
貴官の代表者は絶対に射撃される事なかるべし。
慶良間列島渡嘉敷島米軍最高指揮官
昭和二十年八月十五日午前八時　　サビランドエ　コンノリー
戦隊長直ちに在陣地の全将校を集合協議す。
結果、明日敵陣地に軍使を出すことを決定、各中隊及び前進陣地に此の旨連絡、最悪の事態を考慮配備す。
海軍水兵兵長、吉田実、陸軍一等兵川崎貞一、国頭方面より儀志布島に漂着、第三中隊の斥候結城伍長本部に連行。
本部勤務稲葉伍長戦死す。
軍使、次の通り決定す
陸軍中尉　木村　明　　陸軍軍曹　吉田政一
陸軍少尉　知念朝睦　　陸軍軍曹　中島重吉

八月十七日　〇九三〇　整備隊長木村中尉以下四名軍使として出発、米軍と会見連絡、情報収集後一二〇〇帰隊す。大東亜戦争は終結、連合軍に降伏したる模様なり戦隊長全将校を集め協議す。明、十八日、戦隊長米軍司令官と会見することに決定、最終重要段階に到る。

八月十八日　〇九〇〇戦隊長、整備隊長木村中尉以下十一名米軍司令官と会見のため出発す。
渡嘉敷に於いて会見席上、在沖縄本島連絡所勤務高比軍曹、第二戦隊中川中尉降伏説得のため来島しあり、我軍の無条件降伏確定的なり。
戦隊長、米軍司令官に上級指揮官の降伏命令の受領を要求、命令

の伝達迄降伏を拒否、停戦協定のみを締結、意見の交換、終戦処理の協定を行う。

一五〇〇帰隊す。戦隊長、本部、第一、二、三各中隊候補生、先任下士官、谷本伍長以下四名を集合せしめ終戦の経過を説明、進退の決定をせしむるも各下士官、戦隊長に進退を一任す。

終戦処理協定に依り、明十九日、二十日の二日間戦死者の遺骨収集、兵器弾薬の集積を実施することを通達命令す。

兵器類の携行は絶対にしない事。

米軍陣地内に立入らざる事。

戦隊長各隊前進陣地及び阿波連駐止斥候連下隊に副官をして其撤収を命令する。副官知念少尉各隊前進陣地に連絡之を撤収せしむ。

阿波連駐止斥候連下隊撤収せしむる連絡文　　知念少尉

連下少尉殿

長イ間御奮闘深ク感謝ス小官　貴官ニ思イ苦シキ事ヲ告ゲネバナラヌ時ガキタ　畏クモ天皇陛下ニ於カセラレテハ八月十五日大東亜戦争終末ニ関スル詔勅ヲ漁発アラセラレ大東亞戦争ハ終リヲツゲタ

随ッテ部隊ハ昨十八日〇八〇〇ヨリ渡嘉敷ニ於イテ在米軍司令官ト会見停戦協定ヲ結ンダノデアル我々軍人トシテ誠ニ残念ナレドモ致シ方ナシ　協定ト雖モ単ニ停戦ノミニシテ後ノ武装解除ニ非ラズ。我々ハ飽ク迄上級指揮官ノ命ニヨリ行動スベク協定シ近日中決定セル筈、貴官ノ心境小官ニハ克ク察セラレルモ又部隊長殿ノ心境モ察セラレ度　疎道幾十幾百年続クトモ戦後ノ復興ニ努メ戦闘開始前ノ如キ勇壮無比ナル日本ヲ再現シヨウデハアリマセンカ　又ナスベキ我々ニハ任務アリ　貴官モ大御心ヲ奉体シ忍ビ難キヲ忍ビ耐エ難キヲ耐ヘテ奮闘ノ程協定後ノ処置トシテ多数ノ整理モアリ指示モアル故　明日中ニ阿波連ニ於ケル全部ヲ整理シ本十九日中ニ本部ニ帰隊セラレ度、同伴シアル下士官　兵　防召兵モ引揚ゲラレ度。糧秣ハ持テルダケ持ッテ兵器ハ各人携行兵器ヲ外爆薬其ノ他ハ一箇所集積ヲナシ爆薬弾薬等、危険物埋没シテ数量、品目ヲ記シテ標識ヲ立テ明ラカニセラレ度　詳シキコトハ帰隊面談ノ上在阿波連間幾多ノ

苦難誠ニ未練アル事トハ存ゼドモ何事モ命ノ侭

右取急協定後ノ処置トシテ連絡致ス迄

昭和二十年八月十九日　　於　本部

十九日一三〇〇　受領

八月十九日　各隊早朝より、戦死者の遺骨収集を行い茶毘に附す。水上戦死者、敵陣内戦死者等遺骨収集不可能なるものは其の最も近き所の霊石を奉持する。

八月二十日　第一中隊前進陣地に於いて各隊兵器を集積し遙か東方皇居をは拝し、兵器訣別式を行う。

太陽は青空に輝き、青い空、青い海に唯静かに周囲の海上は数百の敵艦艇が遊弋或は停泊中なり、静かに唯茫然、戦い既に終わる。八

月二十一日　各中隊身辺の整理を行い収集せる遺骨を戦隊本部に安置。海岸に漂着せる木材をもって白木の箱として白布を包って慰霊祭を行う、各隊の遺骨奉持者を決定各中隊に伝達安置す。

知念少尉以下二名米軍に到り重傷者、戦病者後送のため連絡担架借用し午後帰隊す。

八月二十二日　第三中隊　橋田伍長米軍病院に入院のため知念少尉以下八名出発、米軍司令部に到着一二〇〇帰隊す。

八月二十三日　戦隊長以下十一名米軍と協定のため出発、無条件降伏の調印を行う。戦隊長以下三名敵陣営に入る。

本部勤務西上上等兵戦死す。

八月二十四日　知念少尉以下十名戦傷者、戦病者担送のため米軍司令部より担架を借用し午後帰隊す。

八月二十五日　戦傷者、戦病者米軍病院に入院のため出発、担送す。

八月二十六日　本部及び各隊敵陣営に入るため西山陣地を出発、渡嘉敷米軍陣地に入り武装解除を受く。全員座間味島収容所に入る。本二十六日を以て三月三十日より一六〇日余の戦闘は終り、幾十幾百の戦友を此の渡嘉敷に、水漬き草むし或は大空に飛び散りて悠久の大義に生き、其の魂魄故郷の山河に帰り父母に或は妻子に抱かれん事を祈り吾等又祖国の復興を決意し敵軍門に降り俘虜収容所に入る。

十二月三十日　座間味島収容所を出発、渡嘉志久前面より留利加波沖を経て沖縄本島に向かう。
午後沖縄本島石川収容所に入る。
昭和二十一年一月三日　石川収容所を出発、那覇港より乗船。
一月七日　浦賀港に到着、浦賀引揚掩護局に到着、同地にて復員手続きを実施。
一月十日　引揚掩護局に於いて復員業務完了、解散。
各自出身地に帰郷す。

二十五周忌　慰霊祭弔辞

弔辞　謹んで渡嘉敷島及び此の周辺に於いて戦没されました村民の方々並びに将兵の御霊に申し上げます。

顧みまするに二十六年前恰も大東亜戦争風雲急を告げる昭和十九年九月、私達海上挺進第三戦隊及び支援配属部隊は特攻任務を持って、此の渡嘉敷島に配備されたのであります。

その十月沖縄空襲、那覇全焼、台湾沖航空戦等此の島にも緊迫の度が加わる中、御当地皆様方の御協力により軍民一体必死の作業が実を結び、特攻準備は略完成し三月二十三日連合軍の来襲を迎えました。

熾烈な敵機の空襲艦砲射撃の下に陰忍満を持しつつ、遂に同二十六日未明出撃準備を下令、敵弾下勇躍泛水作業を強行致しましたが、天吾に味方せず泛水に長時間を要し、白昼強行せんか他戦隊の戦略企図秘匿の為涙を呑んで自沈するの止むなきに至り、皆様方及び吾々の苦労も一瞬にして水泡となったのであります。

翌二十七日海岸にて上陸する連合軍と軽戦の後島の北部二三四、三高地付近に撤退爾後、此の天嶮を利用し持久を策して斬り込、防御戦闘の傍ら数少ない兵器弾薬糧秣を以て皆様方と鞏固な団結の下、連合軍を此の渡嘉敷に拘束し八月十五日終戦を迎え任務を終わったのであります。

二十五年前の今日三月二十八日敵の包囲する処となり皆様方は刻々と迫る危機に皇国の必勝を祈りながら自らの生命を絶ち、護国の鬼となる悲惨事を生じ亦敵を迎え撃ち自ら斬り込み敵弾に斃れ、或は地雷に触れ病に飢餓に斃れる者続出し、数多く尊い犠牲者を出したのは戦いの常とは申せ誠に遺憾に堪えません。

然しながら戦争終結以来実に二十五年皆様方の御霊の加護により我が祖国日本は戦後の廃墟と飢えの中から立直り、国運は今や世界の注目するする処となりこの沖縄の復帰も翌々年と決定致しました。

偲ぶに皆様方の尊きいけにえも決して無でなく平和な日本建設の礎として史上高く讃えらるべく皆様の御霊を以て冥すべきでありましょう。

皆様方とあわただしい別離をしてより二十五年、御当地村長様、校長様方始め御有志皆様方の御好意と並々ならぬ御援助により、我々戦没者隊員の御遺族共々遙々、海碧き南海の此の渡嘉敷島に来る今、此の白玉の塔の前で皆様方の御霊を弔らわんとするに既に幽明境を異にすると謂も、島の一木一草に在りし日の御姿を偲び、波の音にも其の雄叫びを感じ、萬感胸に迫りて唯感無量云はんとして言葉にならず、語らんとして涙にむせび、ひたすらに皆様方の御冥福を御祈り申上げるのみで御座居ます。

願くば在天の御霊安らかに冥し来りて吾等の弔を御享け下さい。

昭和四十五年三月二十八日

元海上挺進第三戦隊長　　赤松嘉次

海上挺進戦隊顕彰之記

昭和十九年戦局の頽勢を挽回すべく、船舶特別幹部候補生の少年を主体とし全陸軍より選抜せる下士官、将校野精鋭を以て編成されたる陸軍海上挺進戦隊は、二五〇キロ爆雷を装備せるベニヤ製モーターボートにより一艇以て一船を屠るを任務とし、此処幸之浦の船舶練習部第十教育隊に於いて昼夜を分かたぬ猛訓練に励み、第一戦隊以下三十ケ戦隊が同年九月以降続々沖縄、比島、台湾への征途にのぼり、昭和二十年一月比島リンガエン湾の特攻を初めとし同年三月沖縄戦に至る迄壮烈鬼神も泣く肉迫攻撃を敢行しその任務を全うせし者或は戦局の赴く所己むをえず挺身陸戦に転じ奮戦せし者を含め戦闘参加の勇士二二八八名中再び帰らざる隊員実に一六三六名の多きに達し挙げたる戦果敵艦船数十隻撃沈、誠に嚇々たるものありしも当時は、秘密部隊として全く世に発表されざるままに終われり。而して又第二次訓練再開されるや第三十一戦隊以下十二ケ戦隊が九州、四国、紀

州の各地に展開し米軍の本土上陸に備え更に第四十一戦隊以下十一ケ戦隊は終戦当時当地に在り原爆投下直後の広島市民の救出残骸の整理に挺身活躍同年十月艇を焼き部隊解散せり。　此等教育期間中の殉職者も数十名に及び又各戦隊に配属されたる基地大隊も戦隊出撃後は陸戦に殉じ殆ど生還するを得ず。その運命を共にせるものの如し。祖国の為とは言え春秋に富む身を国に殉ぜし多数の若者の運命を想う時誠に痛惜の念に堪えず。ここにその霊を慰め後世に伝える為この碑を建立するものなり。

昭和四十二年十二月三日

元教育隊長　　斉藤義雄

所在地　広島県安芸郡江田島町幸之浦区字サクラカワ一三六八〇番地